

P-061

発達障がいグレーゾーンおよび
未受診状況にある子どもの
保護者支援の効果富澤 弥生
東北福祉大学

【目的】

発達障がいに関して初診まで何カ月も待たされ、支援も受けにくい現状がある。本学では、保護者支援の一つとして、子どもの年齢・診断の有無などの制限なく、小児看護CNS（専門看護師）がペアレント・トレーニングを定期的に開催し、広報は大学HPで行っている。本研究は、発達障がいグレーゾーンおよび未受診状況にある子どもの保護者支援の効果について明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は保護者支援に参加した計7グループ、子どもの年齢、症状、参加目的、参加のきっかけ、効果については終了後の感想にあった子どもと保護者の変化から分析した。

【結果】

対象は計44名、うちグレーゾーンおよび未受診状況にある子どもの保護者は19名(43.9%)であった。幼児10名・小学生9名、おもな症状は、かんしゃく、こだわり、多動、不登校、暴力であった。参加目的は、親の対応を変えるしかないと言われた、ほめたい、怒りたくない、小学校入学前にできることをしていきたい、などであり、参加のきっかけは、ネット検索、知人・支援センター・病院・保育園からの紹介であった。効果について、＜子どもの変化＞のデータ例として、「自分からやるが増えた」、「これでもできるよと話してくれるようになった」があった。＜保護者の変化＞のデータ例として、「今までの対応がすべて悪いほうへ導いていたのだとわかった」、「子どもに過大な要求をしていた」、「ほめていたつもりができていなかった」、「ストレスが減った」、「冷静になれた」、「気持ちが穏やかになった」、「これからも家庭の雰囲気を良くしていきたい」があった。

【考察】

発達障がいグレーゾーンおよび未受診状況にある子どもは43.9%であり、二次障害を疑う症状もみられ、支援が必要とされていることが示唆された。幼児がやや多く、参加目的にもあった「小学校入学前に何とかしたい」という保護者の思いがあると考えられた。参加のきっかけとして、HP等での情報公開、地域での活動実績をつくり紹介につなげることが重要と考えられた。効果として、子どものよい行動の変化がみられ、保護者は、よりよい子育てができることで、過去の反省など気づきが得られていた。冷静や穏やかなど気持ちの変化もみられ、希望を語る効果もみられ、診断にこだわらず、子育てに困っていれば支援を受けられる体制が必要であることが示唆された。

P-062

発達障害の診断が児童・生徒に及ぼす
行動の変化
～養護教諭の語りを通して～副島 堯史、萩原 寧々、北尾 真梨
神戸大学

【目的】

発達障害の診断を受けることによる児童・生徒への影響を明らかにすること、児や家族への適切な支援について検討することを目的とした。

方法：発達障害の診断を幼児期に受けておらず、二次障害が生じてから医療機関を受診し、診断を受けた児童もしくは生徒を受け持った経験のある養護教諭を対象とし、半構造化面接法を行なった。

【結果】

診断前と診断後それぞれで児童・生徒、親、学校・友人の3つに関するカテゴリーが抽出された。

診断前の児童・生徒の様子として、【発達障害特有の行動】【発達障害の特性に対する対処行動】【困りごとの周囲への働きかけ】など8のカテゴリーが抽出された。また診断前の親の関わりとして、【母親の問題意識の低さ】【父親の問題意識の低さ】【児童・生徒の特性に対する認識】など7カテゴリーが抽出された。診断前の学校・友人の関わりについては【発達障害の診断に向けての親への支援】

【発達障害の特性に合わせた学校から児童・生徒への支援】【周囲の児童・生徒からの支援】など6カテゴリーが抽出された。

診断後の児童・生徒の様子については、【家での過ごし方の改善】【発達障害特有の行動の改善】【交友関係の改善】【発達障害の特性行動改善による自尊心の高まり】など10カテゴリーが抽出された。診断後の親の関わりについては、【診断後の発達障害の特性への支援行動】【発達障害の診断への抵抗から学校への不信感】【発達障害の診断が他者に知られることへの抵抗】【発達障害の内服治療・通院への抵抗】の4カテゴリーが抽出され、診断後の学校・友人の関わりについて、【親の支援行動に対する働きかけ】【発達障害特性に合わせた学校から児童・生徒への支援の工夫】【発達障害の特性に対する周囲の理解】

【発達障害特性に合わせた学校から周囲の児童・生徒達への働きかけ】の4カテゴリーが抽出された。

【結論】

発達障害の診断が児童・生徒の行動へもたらす変化は、診断前の彼ら自身の特性に対する気づきや困り感の有無が影響していることが明らかとなった。また、児童・生徒だけでなく親が問題意識を高め、障害を受容していくことができるかが、診断後の彼らの行動に変化をもたらすと考えられた。また、支援者は児童・生徒に対して本人の特性への気づきを促す支援が必要であり、親へは信頼関係を構築しながら、親の障害受容を支える支援が重要であると示された。